

平成27年度活動報告シート ◆

団体名：NPO法人 むさしの里山研究会

代表者：理事長 新井 裕

URL : www.npo-satoyama.org/

1. 活動が必要とされた状況

現在耕作放棄農地が増加し、今後も増加すると見込まれている。耕作放棄地の増加は景観を阻害するばかりではなく、生物多様性の低下、ゴミの投棄、火災、犯罪の誘発など様々な問題が生じる。このため、耕作放棄農地の解消と有効活用が喫緊の課題となっている。そこで、当会では発足当初から耕作放棄水田の有効活用法として、水辺ビオトープ作りや水田への復元を行ってきた。これは、水生生物の生息場所を確保するとともに、里山景観の保全、自然体験の場としての活用を目的としたものである。今回の助成事業はその活動成果を冊子としてとりまとめ、関係団体への参考に供する目的で実施したものである。

2. 活動の内容（実施時期、参加人数、活動内容など）

調査場所は埼玉県寄居町の耕作放棄水田だった場所を整備した「末野トンボ公園モデル地区」、「折原とんぼ公園」、「おぶすまトンボの里公園」、「ビオトープ実験池」「たんぼ生き物公園」の5ヶ所である。これらの場所の水辺ビオトープとしての評価をトンボ、バッタ、甲虫を指標として各生物群を専門とする3名が調査し、その結果を報告書としてとりまとめ、関係団体等は無償で配布した。



3. 活動の成果

耕作放棄水田に池を掘ったり草刈を行うことにより、トンボなどの水生生物と湿性生物の生息場所となることが明らかとなった。しかし、草刈等の管理を行っても、年数の経過に伴い、池が消失するなど環境の悪化を回避することができなかった。また最近ではイノシシの出没による踏み荒らしへの対応が課題となっている。バッタ類に対しては草刈頻度や刈り取りの高さなどを考慮することにより、種の多様性が保持できることが明らかとなった。

4. 今後に残された課題

今回の報告書はビオトープとしての効果の検証を中心としたため、公園としての活用に関しては検証しなかった。しかし、これまで今回の調査対象とした水辺ビオトープで自然観察会や農業体験などを行っており、自然体験や環境学習の場としての検証が今後の課題として残された。